

くなどの仮設置を行います。このスペースについては、石垣修理工事の期間は通行止めとなります。

今回の二の丸東側石垣修理工事は、令和4年度まで実施予定で、史跡津山城跡におけるこれまでの石垣修理の中で最も規模の大きいものとなります。来城者の皆様にはしばらくの間ご迷惑をおかけしますが、ご理解、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

裏下門東側石垣の解体修理が完了しました

昨年度から継続していた裏下門東側石垣の解体修理工事が完了しました。昨年度の工事では石垣の解体と、解体に伴い石垣の構造を確認するための発掘調査を実施しました。今年度はこれらの調査成果をもとに、石垣の積み直しと石垣天端面の土系舗装を行いました。

石垣の積み直しでは、積石を正しい位置に据え直します。石垣の石は、どの石も同じ形ではないので、石同士の接合するポイントが一定ではありません。石の接合部のかみ合わせが悪いと元の石垣の姿に戻らなかったり、石垣が不安定な状態になったりするので、全ての接合部がしっかりかみ合うように据え直すことが重要です。

また、間詰石（積石と積石の隙間に詰める小さな石）が欠落して石垣内部の栗石が露出していた部分は、積石同士がよりしっかりかみ合うように間詰石を詰め直しました。これらの作業は、石垣専門の石工さんの経験と技術がものをいうところです。

石垣解体に伴う調査によって、裏下門東側石垣は北端から3石目までを部分修理していたことがわかったので、この部分修理範囲を石垣天端面にわずかに段差をつけることにより表示しました。北側の少し低くなっているところが修理範囲です（写真8）。最後に、石垣内への雨水等の浸透を防止するため、天端面の土系舗装を行いました。舗装についても、修理範囲が区別できるよう段差を付けた舗装としました。

史跡津山城跡の整備工事については、当面は二の丸東



写真5 裏下門東側石垣解体状況（北西から）



写真6 石垣北面修理前（左）と修理後（右）



写真7 北西から（修理前）



写真8 北西から（修理後）

側石垣を中心に実施します。工事の進捗状況については、随時お知らせしていく予定です。

<p>津山城だより No.24 2020年3月 津山市教育委員会 文化課</p>	
発行年月日	令和2年3月31日
編集・発行	津山市教育委員会文化課 〒708-0824 岡山県津山市沼600-1 TEL (0868) 24-8413
印刷	株式会社廣陽本社

津山城だより

TSUYAMAJODAYORI

No.24
2020年3月

津山市教育委員会
文化課



写真1 二の丸東側石垣（宮川上空から）

二の丸東側石垣の修理工事をはじめました

史跡津山城跡の整備は、平成28年4月に策定された、『史跡津山城跡保存整備計画（第Ⅱ期）』に基づき実施しています。

これまでは整備事業は、整備項目のひとつである『虎口通路整備』に基づき、搦手虎口（本丸北側の埋門から北の出口にいたるまで）を中心に行ってきました。

もうひとつの大きな整備項目である「石垣修理」につ

いては、これまで天守台の間詰石補修や、七番門の袖石垣復元などを実施しています。

二の丸東側石垣については、津山城だより第15号でも触れましたが、今回は本格的な修理工事が始まるため、あらためてこの石垣について触れるとともに、昨年度から継続して実施している裏下門東側石垣修理工事についても紹介します。

二の丸東側石垣について

津山城の東側に、本丸から1段下がったところに位置する帯曲輪があります。この帯曲輪をなす石垣は、全長約65m、高さ約7～8mをはかります。石垣天端には幅5m程度の平坦面があり、平坦面の西側には北から月見櫓、矢切櫓、太鼓櫓がのる高石垣がそびえ立ち、東側からの防御線をなしています。

一方、石垣の下にも幅2m～4mの帯曲輪がみられます。この帯曲輪の北側部分には長さ35mの腰石垣がみられますが、南側には石垣はありません。

石垣は、現在津山城の絵図では最も古いものである正保絵図にもみられ、後世の絵図にも常にその描写があることから、築城時から存在していた石垣であると考えられます。

元禄10年(1687)頃のものとする『津山絵図』に描かれたものをみると、現在の石垣の在り方と同じであることがわかります。二の丸東側石垣部分を見ると、「高さ四間半」(図1の赤丸部分≒8.5m)とあり、その下には「稲荷宮」(千代稲荷)が描かれています(図1)。

文献等からは、明和6年(1769)に「太鼓櫓下」の石垣が長さ10間、高さ5間にわたって崩落し、稲荷宮(千代稲荷神社)の玉垣や建造物に被害が及んだという記述

がみられます。この記述をそのまま読むと、「太鼓櫓の下にある石垣」は、今回修理を行う二の丸東側石垣のことを指している可能性が高いと言えます。

この時の様子が書かれた『御作事日記』の記事を紹介します。

・『御作事日記』明和6年(1769)正月7日

「御太鼓櫓北方拾壺番御門之間、帯曲輪之外、塀覆石垣を南北拾間崩」

・『御作事日記』明和6年正月8日

「一、拾壺番御門、御太鼓櫓之間、石垣拾間、塀覆共二崩。勿論、外曲輪二而御座候。

(中略)

一、崩石垣、高さ五間。腰石垣通り、鼻麓まで三拾式間四尺。尤、崩、石垣際合添。石垣間二平地、式間程、有之。

再び石垣が崩落したのは約200年後の昭和39年(1964)で、この年の集中豪雨により幅24.5mにわたり石垣が崩落しました。石垣は翌40年から41年にかけて積み直しが行われましたが、積み直しを行った際に、崩落していない部分とのすりつけを行っていないことから、積み直し部分と崩れていない部分の境界に段差が生じ、結果

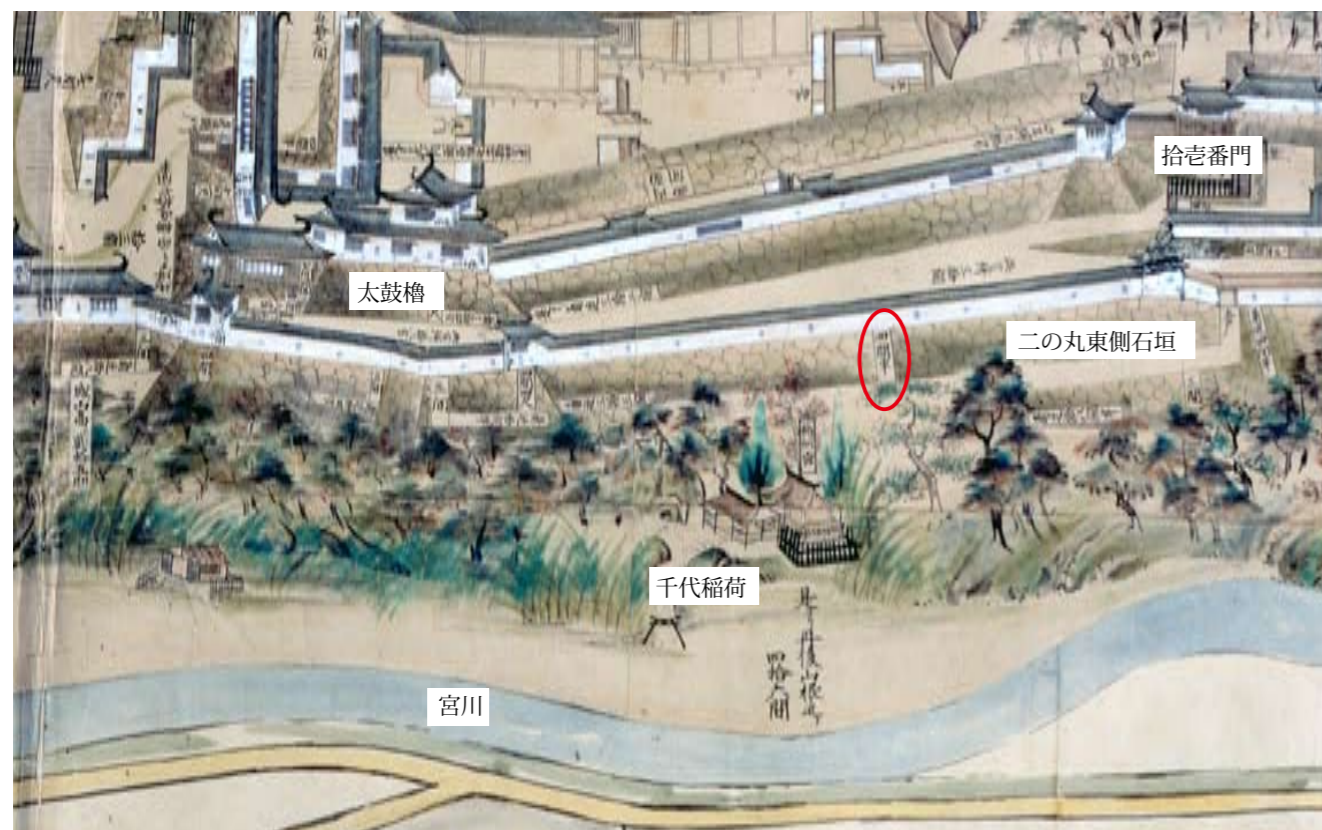


図1 二の丸東側石垣の位置(『津山絵図』より抜粋)



写真2 積み直した所と積み直していない所との境界にできた段差(黄色矢印)

的に孕みのある部分の石尻が表出してしまうようになりました(写真2)。

石垣修理について

石垣の解体修理にいたるまでは、石垣周辺のボーリング調査や、石の動きを観測する三次元計測、発掘調査など、様々な調査をもとに検討してきました。

今回の修理工事で解体を行う予定範囲は、写真3のとおりです。

修理に先立ち、まずはじめに工事の際に影響する樹木(石垣の上に生えているモミジやサクラなど)の伐採を行いました。伐採した樹木については、有効に活用して



写真4 伐採した樹木(配布終了しました)

いただけるよう、無料配布を行いました(写真4)。今後は、足場などの仮設置や、石垣表面の清掃、丁張りの設置、番号付けなどの作業を順次行っていきます(現在作業中)。

また絵図等の史料から、修理予定石垣の上面(天端面)には、土堀の痕跡等の遺構が残っている可能性があります。このため、解体修理を行う前に発掘調査を行います。発掘調査は、石垣を解体する前にも行いますが、解体の過程において、石積みがどのように行われているのかを確認するため、石垣を解体しながら並行して実施します。発掘調査の成果については、今後お知らせしていく予定です。

高石垣を隔てた本丸側についても、重機や解体した築石、裏込め石、間詰石等を置くため、碎石及び鉄板を敷



昭和40・41年度修理範囲

今回修理範囲

写真3 解体する二の丸東側(西から)